

## 特集

## 変わりつつある網膜剥離の常識

## 序 論

門之園一明\*

最近、医療従事者の網膜剥離の手術を行う機会を得ました。その患者さん曰く、時間単位で視野が欠けてゆくことがなんと恐ろしいことか、この世がなくなってゆく恐怖心に苛まれる惨い時間である、と赤裸々に語っていました。網膜外科は、網膜剥離に始まり網膜剥離に終わるとかねてより言われています。その意味は、あらゆる網膜疾患および眼科疾患の最後は網膜剥離であるということです。網膜を専門にされていない読者の先生においても、眼科医であれば必ず押さえておくべき疾患と思います。本特集では、網膜剥離のこれまでの常識と最新情報をお届けします。まずは、なじみのある5つのこれまでの常識とその変化を記載します。



## これまでの常識

## 1 網膜剥離は二峰性

「網膜剥離の年齢層が最近、変化しているなあ」と感じていませんか？ また、発症件数も増加傾向にあるように感じている先生方は多いと思います。これまで、二峰性といわれていた発症年齢の層は、若年化し one peak に代わりつつあります。Covid 時代の網膜剥離の疫学調査を踏まえ、中村先生から、網膜剥離の最近の疫学について詳細にレビューしていただいています。

## 2 剥離手術での網膜下液の完全除去

網膜剥離手術では早期の下液の吸収が重要であるという常識があると思います。これは、いまでは、必ずしも正しくはありません。白木先生の記事は、画像解析の進歩で明らかとなった、網膜外層の襞形成 (outer retinal folds) が視機能に及ぼす影響について記載しています。網膜下液がある症例でも、長期的に視機能の向上が認められる可能性が報告されています。

## 3 倒像鏡を使う網膜剥離手術

双眼倒像鏡を使う網膜剥離手術は、シャンデリア照明を使用する手術顕微鏡に移行しつつあります。これは、最近の手術の傾向ですが、双眼倒像鏡検査が重要な検査であることには変わりなく、逆に術前の眼底検査が軽視されつつあることに警鐘を鳴らしています。網膜剥離手術の権威の喜多先生の記事に、わかりやすく記載されています。

## 4 小児網膜剥離は難治性

これまでの小児網膜剥離は、系統的理解が不明確で治療方法も未解決でした。しかし、近年、疾患のガイドラインが提唱され、治療成績が向上してきています。近藤寛之先生が、最新情報を詳細にわかりやすい図を交えて報告しています。

## 5 網膜剥離はその日のうちに手術

剥離手術が緊急手術であることには変わりはありませんが、いくつかの研究により黄斑剥離症例では、手術時期に関しては、必ずしも明解な答えは出ていないのが現状です。黄斑剥離のある症例

\*Kazuaki KADONOSONO 横浜市立大学視覚再生外科

では、3日以内というのが推奨されています。施設の状況など多くの問題を抱えるテーマですが、剥離手術の専門家の馬場先生の解説をお読みください。

多くの眼科医にとっては、網膜剥離は特殊な疾患ですが、最近の研究によりさまざまな知見や治療方法が開発されています。網膜復位率を競う時代からより質の高い視機能の獲得へ向けての時代に変わりつつあります。

\*

\*